第10回徳洲会グループQI大会開く

ベストプラクティス水平展開し医療の質向上や業務改善を推進

7月度 徳洲会グループ医療経営戦略セミ

第10回徳洲会グループQI大会を開き、各カテゴリの優秀演題の発表と表彰式を行った。応募演題数は過去最多の134演題。QI大会は個々の病院・施設の取り組みからベストプラクティス（最良の実践）を吸い上げ、知見を共有し水平展開を図り、グループ全体の医療の質向上や業務改善の推進につなげる取り組みだ。



東上理事長を囲んで優秀演題賞などの受賞者らが記念撮影

QI大会は6つのカテゴリに分け演題を募集。査読により22演題を選出し、eラーニングを活用してグループ全職員が視聴・投票し、優秀演題を選んだ。セミナー会場では、各カテゴリでトップとなった優秀演題6演題に加え、理事長推薦演題を合わせた計7演題の発表・表彰を行った。

一般社団法人徳洲会（社徳）の深野明美・医療安全・感染管理部部長が司会を務め、湘南大磯病院（神奈川県）の鵜川美穂・看護部長、湘南藤沢徳洲会病院（同）の菊池豪事務長、共愛会病院（北海道）院長の太田智之・徳洲会専務理事が順に座長を担った。本大会での発表順に演題を紹介する。

はじめに、「患者目線」で選出された吹田徳洲会病院（大阪府）の兵頭麻利助産師が「『手ぶら入院』を取り入れて」をテーマに発表。出産で入院する妊婦さんの準備負担を軽減し、安心して出産に臨める環境づくりを目指し、入院中の着替えやタオルを病院が用意する「手ぶら入院」を導入した。お産セットの内容も見直し、患者さん満足度の維持（80%）とコスト削減を両立。満足度は100%と目標を上回り、「知り合いの妊婦さんにもすすめたい」との回答も100%だった。

続いて「職員目線・働き方改革」では、南部徳洲会病院（沖縄県）の新里かおり看護師が「前残業低減への取り組み」と題し発表。始業前に出勤して患者さんの情報を整理する「前残業」の常態化という課題に対し、情報を集める作業をRPA（ソフトウエアによる業務の自動化）、読み取る作業をAIに任せ、1枚のワークシートに自動でまとめる仕組みを構築。情報収集を大幅に効率化し、前残業時間を平均で約6分短縮した。

「医療安全」で選ばれたのは、鹿児島徳洲会病院の出水楓・臨床検査技師が発表した「生理検査での受付の自動化とラベル運用」。新病院への移転を機に、患者さんがバーコードで受け付けを行うと、ラベルが自動発行される仕組みを導入した。手作業の工数や転記ミスを減らすことで、受け付け時間を約94%短縮。受付に関するインシデントも14件から5件に減った。

「地域社会」では、福岡徳洲会病院の今泉彰太MSW（医療ソーシャルワーカー）が「救急患者連携搬送（下り搬送）システムの構築」を発表。搬送された患者さんを診療後、対応可能な連携先に下り搬送を行う取り組みだ。看護師が同乗するのが特徴的で、院内にワーキンググループを立ち上げ、搬送基準やフローチャート、空床状況リストを整備した。転院調整にかかる時間を平均約23分短縮し、期間内に77件の下り搬送を実施した。

「臨床」で選出されたのは、湘南藤沢病院の田沼周悟看護師による「外来での急変が減少した外来版RRS」。入院患者さんを主な対象とするRRS（迅速対応システム）を、一般外来の患者さんにも導入した。事務職員を含む全職員が異常を察知して起動し、救急外来の看護師と医師が対応する仕組みで、コール条件も明確化。運用開始後は外来後の急変が減少し、一般外来からの緊急カテーテル搬送は0件となった。

「経営」は、福岡病院の立川茉梨絵薬剤師が「薬剤師外来における残薬調整による医療費削減効果」を発表した。外来で化学療法を受ける患者さんに対し、薬剤師が診察前の待ち時間に面談し、残薬に応じ処方量を調整する取り組み。残薬の確認は問診の都度、実施した。薬剤費の削減額は年間約370万円に上り、目標値を大きく上回る結果となった。

理事長推薦演題には、東京西徳洲会病院の田中美里・臨床検査技師が発表した「異常心電図から循環器疾患の早期発見へ」が選出。救急外来を受診し、入院時のスクリーニングとして行った心電図から異常所見を抽出し、医師に報告して心エコー検査につなげる取り組みだ。医師へのアラート実施率は目標の100%を継続して達成。確認する技師を増やすことで、心エコーの実施率向上にもつなげた。

発表終了後、東上震一理事長は「どのカテゴリも論文になる水準の演題ばかりでした。しっかり論文化し、徳洲会のなかだけでなく世の中に発信していくことが、病院や個人の評価・業績にもつながります。ぜひ形にして成果を残してほしい」と総括した。

山下・徳洲会特別顧問

上部消化管外科の未来を創るグループ全体への貢献に意欲



「徳洲会の上部消化管外科に対する支援体制を確立したい」と山下・特別顧問

山下好人・徳洲会グループ消化器外科ロボット手術特別顧問兼岸和田徳洲会病院（大阪府）院長補佐・上部消化管外科部長が「徳洲会グループ上部消化管外科の未来を創る―標準化から世界へ―」と題し講演した。

はじめに自己紹介を行い、4月に徳洲会に入職するまでの経歴を説明。上部消化管外科を専門とし、これまで上部胃がん・食道胃接合部がんに対する新たな手術手技を考案したり、ロボット支援手術をはじめ低侵襲治療の豊富な実績を示し、各地で指導してきたエピソードを紹介したりした。

次に、胃がんと食道がん診療に関する現状を説明。胃がんについては、発生数の減少で術者の経験値が下がり、手術の質低下が懸念されることや、その状況下で最近は手術難度の高い食道胃接合部がんが増加傾向にあることを指摘した。食道がんについては、臓器の構造が複雑かつ広範囲なことから、「消化器外科手術のなかで最高難度」とし、「食道外科専門医の関与がきわめて大切」と説いた。

いずれも、「今後は経験豊富な医師・医療機関が行うべき手術」と展望した。ロボット支援手術にも触れ、実施するための施設要件を示すとともに、ガイドラインでの位置付けや病院経営の面から、その重要性が高まりつつある状況を説明。自ら手がけた手術動画で手技のポイントやロボット支援手術のメリットも解説。ただし、「あくまでも消化器外科領域での話ですが、質の高い外科医がロボットを使うことで初めて真価が発揮される」とし、「ロボットを使いこなせる人材の育成が大切」と強調した。

最後に、私見を交えながら徳洲会グループの上部消化管外科領域について言及。入職後、グループ内での活動が広がりつつあることを示し、将来的には人材育成、診療・手術の標準化、臨床研究・学術活動、施設間連携をミッションとする“Tokushukai Upper GI Academy（TUGA）”を立ち上げ、TUGAを通じ才能ある若手外科医を育成し、全国どこでも質の高い上部消化管外科診療を提供できる体制づくりに意欲を見せた。

新・院長紹介

6月1日付でかりゆし病院（沖縄県）に境田康二院長、7月1日付で都倉病院（京都府）に都倉隆院長、8月1日付で皆野病院（埼玉県）に吉野友康院長、おもろまちメディカルセンター（沖縄県）に玉木正人院長、徳之島徳洲会病院（鹿児島県）に實操二院長、同日付で開院した宇治徳洲会リハビリテーション病院（京都府）に平田知大院長が就任した。



かりゆし病院に境田院長



都倉病院に都倉院長



皆野病院に吉野院長



おもろまちメディカルセンターに玉木院長



徳之島徳洲会病院に實院長



宇治徳洲会リハビリテーション病院に平田院長



瀬戸内徳洲会病院に浦元院長

境田院長は「石垣島徳洲会病院（沖縄県）と協働しながら、島の医療を守っていきたいです」、都倉院長は「55床と小規模病院ながら、グループ病院と連携を強めていきたいです」、吉野院長は「身の引き締まる思いです。地域に根差した医療に努めます」、玉木院長は「東上震一理事長からいただいた『沖縄一の病院をつくろう』との言葉を実現してまいります」、實院長は「島に眠る徳田虎雄・名誉理事長に見守られながら、離島医療に力を尽くします」、平田院長は「『徳洲会』の名を冠したリハビリテーション病院は初めて。希望と夢をもって取り組みます」とそれぞれ抱負を語った。

また、前回5月度のセミナーに欠席した瀬戸内徳洲会病院（鹿児島県）の浦元智司院長（6月1日付）も挨拶し、「離島は慢性的な人材不足です。グループの力で離島、瀬戸内を応援していただければ」と協力を呼びかけた。

第4回徳洲会国際心臓血管セミナーin葉山

グループを挙げ9月19日から2日間開催

一般社団法人徳洲会医療経営戦略室の若山俊彦課長が第4回徳洲会国際心臓血管セミナーin葉山について説明した。同セミナーは9月19日から2日間、湘南国際村センター（神奈川県）で開催。主催は医療法人徳洲会で、現地とライブ配信のハイブリッド形式で行う。メインテーマは「僧帽弁治療の最前線」だ。

1日目は午前に徳洲会グループの各病院がセッションを担い、午後は海外から招聘（しょうへい）した医師に加え、徳洲会が国際協力をしているインドネシアの国立ハラパンキタ循環器病センターの医師が登壇。ロボット手術のセッションにはインドから専門医を招き、心臓血管外科の手術ビデオライブも予定している。2日目は国内の著名な医師が複数登壇。また、世界的な医療機関である米国のメイヨー・クリニックのセッションや、循環器内科のカテライブ（心臓カテーテル治療の手技を中継）を行う。

若山課長は「国際的なセミナーを開催すること自体が、徳洲会のブランド力アップにつながります。このセミナーは徳洲会本部や湘南鎌倉総合病院（神奈川県）、葉山ハートセンター（同）だけでなく、グループ皆でつくり上げるセミナーです。若手医師や研修医の参加もお待ちしています」と呼びかけた。同セミナーは、昨年を上回る1,000人の参加を目標としている。

TOKUSHUKAI Medical Assistance Team TMAT Non-Profit Organization

ベネズエラ&熊本地震 現地での救援活動報告

NPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）は先遣隊・本隊を派遣したベネズエラ地震と、活動が続く令和8年熊本地震について、医療支援の状況を報告した。

まず、ベネズエラに先遣隊として出動し、診療にあたった湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の村田宇謙・救急総合外科部長が「WHO（世界保健機関）からTMATがEMT（緊急医療チーム）国際認証取得後、初の海外派遣となりました」と話し、現地で日本の国際緊急援助隊（JDR）と初めて協働し、仮設診療所で診療にあたったことなどを紹介した。

次に野口幸洋TMAT事務局長（一般社団法人徳洲会医療経営戦略室課長）が、7月28日発生の熊本地震での活動速報を説明。福岡徳洲会病院など九州ブロックのTMAT隊員を中心に、熊本市の隣の八代市の避難所に仮設診療所を立ち上げ、24時間、15人体制で診療にあたっていると強調。また、透析室が崩壊した徳洲会グループの鏡クリニックに対して、大隅鹿屋病院（鹿児島県）が透析患者さんの搬送を支援するなど、医療ニーズが多岐にわたることを示した。

野口・事務局長は「各病院が迅速に対応していただき、感謝いたします。引き続き最後までご協力よろしくお願いします」と懇請した。